

平成20年の年頭に当たって

AAINews 第60号でも紹介いたしましたように、我々は過去12年間にわたってニュースレターを発行し続けてきました。過去のニュースレターのタイトルリストを眺めると、この間日本の途上国に対する技術援助の活動に少なからぬ変化があったことがよくわかります。例えば、個別専門家派遣の数が減少し、シニアボランティアの数が増加するという傾向がありました。また、全体的な援助のソフト化という流れの中で、実証調査を含む開発調査や技プロの数が増えてきました。特に、最近では民間委託型の技プロが増大しました。さらに、研修事業においても JICA 筑波での集団研修を中心に多くの研修コースが民間委託型に切り替わって来ました。

こうした流れに沿って、我が社の活動も大きく変化して来ました。1990年代には主流だった長期専門家派遣業務は次第に減少しました。一方、補強として参加するだけだった開発調査については、2002年にはじめて共同受注の構成会社としてオマーンのマングローブ案件を受注しました。またプロ技案件については、2005年にやはり共同受注の構成会社としてシリアの節水灌漑案件を受注しています。これらと並行して、2002年には筑波国際センターで実施したタジキスタン国別特設野菜栽培コースを民間委託型で受注し、その後南部アフリカ地域別特設、南アフリカ国別特設を経て、このところ野菜栽培コースと陸稲品種選定コース等の集団コースを実施しています。業務の形態が変化しても、途上国のために何かをしたいという思いや乾燥地域への興味は変わることなく持ち続けていますし、こうした熱い思いや興味が「国際協力」の原点のひとつだと思っています。

このように我が国際耕種は、海外においては専門家派遣業務、開発調査、技プロといった異なったスキームを、そしてこれらと同時に国内での研修活動を経験する機会を得てきました。こうした経験を通して、海外での経験を国内に、国内での経験を海外に、そして専門家派遣や開発調査の経験を技プロに生かすことの重要性を学んで来ました。また、最終的にはカウンタパートや研修員との人間関係、信頼関係の構築が何にも増して重要なことを強く感じています。中でも、共に業務を行ったカウンタパートたちの存在は特に大きかったと思います。そして、そういった関係の構築には活動の規模や巻き込む人間の数等も重要な要素であると感じています。そうしたこともあって、我が社では当初から草の根活動やローカル NGO との連携といった小規模の活動にも力を注いで来ました。

ローカル NGO との連携については、1999年ジンバブエにおいて草の根無償の外部委託調査としての優良なローカル NGO の選定業務を実施したことが契機となって、水資源の有効利用を目指す NGO との付き合いがはじまりました。農村女性によるグループ菜園活動の活性化やインプット・クレジットの実施を通して協力関係は現在に至っています。その後、研修業務のフォローアップを兼ねて南部アフリカ地域の帰国研修員の活動を支援する中から草の根技術協力活動につなげるような活動を模索しています。今後とも、まだまだ学ぶべきことはたくさんありますが、そろそろ「若さ」の代わりに得たものを、周囲にお返ししていく時期にきているのかもしれないということも感じています。これまでの経験を生かしつつ、小さいながらも光輝くようなそして確かな成果を上げられる活動を目指して社員一同頑張っていく所存ですので、今後ともどうかよろしくお願い申し上げます。

謹賀新年

雪を頂いたヘルモン山とシリア節水灌漑プロジェクトのデモ農場



代表取締役：大沼洋康